

「あらすじ」

推し活が生きがいの花田桃（25）は、舞台俳優のマサ君の古参である。ある日ファンクラブイベントで、マサ君は結婚を発表。桃はマサ君の裏切りに失望する。桃の友人・七実は、桃を元気付けるために婚活パーティーへ誘うが、桃は「失恋を癒せるのは新しい推しだけ」と、推しを愛することにこだわる。ライブ配信サーフィンをしている時に、桃はハルタを見つける。素人同然で芋っぽい風貌。視聴者0人だったが、雰囲気は昔のマサ君に似ており、運命を感じる桃。桃はハルタに投げ銭をする。ハルタの無邪気な反応に気を良くした桃はハルタの推し活を始める。

ハルタ。ハルタの「今日のコーデ」投稿がSNSでバズる。垢抜けたハルタの姿を古参ファンとして嬉しくもあり複雑な桃。桃は七実に付き合い、婚活パーティーに参加する。リアル

アルの男を前にしてときめきを感じず、や

はり自分には推ししかいないと再確認する桃。
七実は「虚構を愛することに意味なんてない」
と一刀両断。険悪ムードになる2人だが、そ
こに、ハルタがライブ配信を開始したとの通
知が入る。路上で配信をする、ハルタと彼女・
ミチ。ミチは以前からハルタと同棲しており、
ハルタがバズったことをきっかけに顔出しし、
カップル配信をすることに決めたのだと言う。
二度目の推しの裏切りに激怒した桃は、デザ
ートナイフを手に取り、飛び出していく。ハ
ルタたちの居場所を突き止めた桃は、ハルタ
を襲撃するがあっけなく失敗。ハルタにとっ
て自分はただの金蔓でしかなかったことや、
ハルタのリアルな態度にショックを受ける桃。
警察署を後にする桃。これから推しではなく
リアルの恋愛をしようと心に決める。同時に
警察署から出てきたのはマサ君。妻への暴行
疑惑で取り調べを受けていたのだったが、そ
うとは知らない桃。運命の再会に驚く桃と喜
ぶマサ君。桃の推しへの愛は止まらない。

「登場人物表」

花田桃	(25)	会社員
真崎和真	(32)	舞台俳優・通称「マサ君」
志藤七実	(25)	桃の同僚
ハルタ	(20)	ライブ配信者
ミチ	(20)	ハルタの彼女
スタッフ		
店員		
婚活パーティーの男	1と3	
アナウンサー		

○ホテル『クローバー』宴会場・入口

『真崎和真ファンクラブイベント会場』の看板。

○同・中

デコレーションされた会場。

赤色を基調としている。

会場内にはポスターが並ぶ。

衣裳を着た姿やプライベート風の和

真のショットなど。

円卓にはドレスアップした人たち。

会場の前方には舞台。

舞台目の前の席、そわそわと座って

いる花田桃（25）。

赤いワンピースを着ている。

手には「マサ君」と書かれたうちわ。

照明が落ち、舞台上にスポットライ

トがあたる。

スーツ姿の真崎和真・通称「マサ君」

（32）が入ってくる。

赤色のネクタイをつけている。

会場内、黄色い歓声が響く。

桃「待って……私がプレゼントしたネクタイ

じゃない？」

和真、桃ににこりと微笑む。

お辞儀をする和真。

和真「みんな、今日は来てくれてありがとう」

拍手が沸き起こる。

和真「……まず初めにひとつ、みんなに伝え

たいことがあります」

桃「何？」

和真「このたび、真崎和真は結婚することに

なりました」

桃「……え？」

会場内、悲鳴が響く。

和真「俺を応援してくれるみんなには一番に

報告したくて、あえてこの場を選ばせても

らいました。これから変わらず舞台の仕

事も頑張るので応援よろしくお願いしま

す」

深々と頭を下げる和真。

会場内、ブーイングとすすり泣きが

響く。

呆然とする桃。

すつきりした表情の和真。

×

×

×

舞台上、参加者と順に握手をする和

真。

スタッフに誘導され、桃の順番が

やってくる。

和真、桃と握手をしながら、

和真「桃ちゃん、いつもありがとうね」

桃、小さく頷く。

和真「このネクタイ、桃ちゃんがプレゼント

してくれたやつ。覚えてる？」

桃「やっぱり……」

和真、桃の顔を覗き込んで、

和真「元気ないじゃん。……びっくりさせちゃったよね？ごめんね」

桃「ほんと、びっくりだよ……」

和真「桃ちゃんのおかげでここまで来れたことに変わりはないから。これから応援してくれたら嬉しいな」

桃「うん……」

和真「桃ちゃん、いつものやつ。やる？」

和真、片手でハートを作る。

桃も、片手でハート。

カメラを持ったスタッフやってきて、

スタッフ「じゃあ撮りまーす！」

浮かない表情のままの桃。

桃、俯いたまま、舞台から降りる。

○桃の自宅（夜）

ワンルームのアパート。

部屋の一角にマサ君のグッズ。

ポスター、うちわ、ペンライトなど。

インテリアも赤を基調としたものば

かり。

ドレスアップ姿のまま、ゴミ袋を手にグッズを次々と入れる桃。

目には涙。

○社員食堂・中

制服姿の桃と志藤七実（25）、向かい合い食事をしている。

定食をどんどん食べる七実。

桃の前には野菜ジュースのみ。

桃、真っ赤な目をしている。

七実、ご飯を頬張りながら、

七実「桃、めっちゃサイクな顔してるよ」

桃「だって、10年だよ？10年も応援して

たのに。ずっと一途に愛してきたのにこの

仕打ちって……」

七実「愛……？結局、ファンはファンでしか

ないんだよ」

桃「そんなの分かってる！」

七実「桃、マサ君にガチ恋だったんだ？」

桃「そうじゃなくて……フアンのおかげで今があるのに！マサ君はそういうところ、しっかり分かってると思ってたのに……」

七実「フアンを大事に思うがゆえ、隠し事し
たくないタイプなんじゃない？」

桃「そんな優しさいらない」

七実「後からバレても怒るくせに」

桃「もう誰のこととも信じられない！」

七実「あっそ」

七実、ご飯を頬張る。

桃「ちよつと、七実ってば！私、真剣なん

だけど！」

七実「やっぱりさ、推しじゃダメってことだ

よ。結局はリアルじゃないんだもん」

桃「じゃあ、どうしたら良いつてわけ？」

七実「婚活パーティー行かない？」

桃「は？急になんで？」

七実「うちらもそろそろそういう歳だから。

桃「もいい加減に現実の男と向き合いなよ。」

ほら、周りを見てみて。良い出会いがあるかもだし」

行き交う男性社員の姿。

桃、しばらく眺めて、

桃「無理！」

七実「どうしたら良いって言ったのはそっち

じゃん：：」

桃「失恋を癒せるのは、新しい推しだけ！」

七実、呆れ顔。

桃、ケロツとして、

桃「今さ、色々な配信者がいるんだよね。気

になる人も出来そうだなうって」

七実「そんな裏切り、マサ君が泣くよ」

桃「先に私を裏切ったのは、マサ君だから。

思い知らせてやるの！」

七実「思い知らせるって、未練たらたらじゃ

ん」

桃「何か言った？」

スマホの通知音が鳴る。

桃、スマホを取り出す。

壁紙はマサ君との2ショット。

桃、目がうるんできて、慌ててスマホをしまう。

○桃の自宅（夜）

部屋にはゴミ袋の山。

コンビ二飯を食べながら、スマホで配信を見ている桃。

曲に合わせてダンスを踊る人。

桃「こういうの、なんで人気なんだろう？」

次の配信へスワイプ。

派手なメイクをする人。

桃「ありきたり」

次の配信へスワイプ。

弾き語りをする人。

桃「下手くそ！」

桃、小さなため息。

桃「マサ君って、まじでどんぴしゃだったん

だよなあ。カッコ良くて、歌も上手くて、

ダンスは……まあまあで……」

次の配信へスワイプ。

ぼーっと座っているハルタ（20）。

髪の毛はボサボサ。よれよれのスウ

エットを着ている。

視聴者数は「1人」。

桃「私しか見てないってこと？ヤバ」

スワイプしかける桃。

ハルタ、視聴者が「1人」になった

ことに気がつき、

ハルタ「……あの、見てくださってありがとうと

うございます」

ハルタ、ペコリとお辞儀。

桃、じっと画面を見つめる。

桃「ちよつと昔のマサ君に似てるかも」

ハルタ、ぼーっとしている。

ハルタのお腹の音が鳴る。

ハルタ「……あ、すいません。今日朝から何

も食べてなくて、お腹鳴っちゃいました」

桃「変なの」

桃、ハルタに500円を投げ銭する。

画面上に「ぴいちゃんからプレゼン
トが贈られました」の表示。

ハルタ、目を丸くして、

ハルタ「え？え？まじっすか？こういうのも
らうの、初です！」

ハルタ、立ち上がり飛び跳ねる。

ハルタ「めっちゃ、嬉しいっす。えっと……
ぴいちゃん、ありがとうございます！」

ハルタ、激しく飛び回る。

スマホが床に落ち、映像が止まる。

「配信は終了しました」の表示。

桃、吹き出して、

桃「おもしろ……」

桃、スマホのホーム画面に戻る。

壁紙は初期設定の柄に変わっている。

○更衣室・中

並んで着替えている桃と七実。

桃「でね、飛び跳ねて喜んでんの！それがめ
っちゃ可愛くて。ていうか、愛おしくて？」

七実「……すっかり元気そうで良かったよ」
桃「しかも、顔が昔のマサ君にちよつと似てるんだよね。これってさ、運命かなあ？」

七実「桃って、運命とか信じるタイプなんだ」

桃「ちよつと！こっちは真剣なんだけど？」

七実「なんか、マサ君がかわいそうになってきちゃって」

桃「だからさあ、薄情なのはマサ君の方なんだってば。私の愛を裏切った！」

七実「本当に好きなら、全てを受け入れるベきだと思うけどな」

桃「それって幻想っていうか。オタクじゃない人の考えっていうか」

七実「受け入れられないことも当然あるってこと？」

桃「そりゃあね。七実だって、彼氏が別の人と結婚するって言い出したら引くでしょ？」

七実「まずその状況が、例えとして成り立っていないんだけど」

桃「不倫とか、薬物とか、犯罪とか、これは無理だなんてことがあるじゃん？ 私にとってそれが結婚なんだよ」

七実「マサ君はリアルな存在じゃないじゃん。

なのに結婚に怒るって理解出来ない」

桃「手の届かない存在をまっとうしてほしいってことだよ。なんで分かんないかなあ」

桃、ため息。

スマホの通知が鳴る。

桃、スマホを取り出す。

ロック画面にはメール通知『真崎和

真メールマガジン』。

桃、顔をしかめる。

○桃の自宅（夜）

カップラーメンを食べようとする桃。
スマホでハルタのSNSを見ている。
フォロワーは15人。
海外の怪しいアカウントばかり。
投稿はスウェット姿がほとんど。

桃「なーんか、ダサイんだよなあ。服装とか、服装とか、服装とか。垢抜けさせてあげたいんだけどさ」

桃、部屋の隅のゴミ袋を見る。

ゴミ袋の中、マサ君のポスターが見える。

マサ君と目が合い、慌ててそらす桃。スマホの通知音が鳴る。

「ハルタが配信を始めました」の表示。

桃、配信画面を開く。

ぼーっとしたハルタの姿。

前回と全く同じスウェット姿である。

ハルタ「こんにちはーあ、こんばんは、か」

頭を掻くハルタ。

桃「愛おしさはあるんだよね。なんか動物みたいで」

ハルタ、視聴者数を見て、

ハルタ「もしかして、ぴいちゃんですか？昨日はありがとうございました」

ハルタ、頭を下げる。

頭がスマホ画面にぶつかって、

ハルタ「いて」

桃、吹き出す。

ハルタ「あの……良かったらコメントとか下
さい」

※以下、ぴいちは桃の配信コメント。

ぴい「こんにちは」

ハルタ「あ、やっぱぴいちゃんだ」

ハルタ、ぺこりとお辞儀。

ぴい「ハルタのこと、めちゃ気になってま
す」

ハルタ「え、ほんとっすか？嬉しい」

ぴい「普段、どんな活動してるんですか？」

ハルタ「えっと……まだ模索中っていうか。

すいません。こんなんで」

ぴい「良いと思います！ハルタのやりたい
こと、見つかるように応援してます」

ハルタ「俺、ダンスとかやりたくて……ど
う思いますか？」

桃、顔をしかめる。

ぴいち「良いと思います！」

ハルタ「ですよ。今、練習してるんで、今度披露させていただきます」

ハルタ、ぺこりとお辞儀。

桃、ハルタに1万円投げ銭をする。

「ぴいちさんからプレゼントが贈られました」の表示。

ハルタ「え？え？」

ぴいち「良かったら、ダンス披露する時のお洋服とかに使ってください」

ハルタ「ありがとうございます！」

ハルタ、自分の服を見て、

ハルタ「ていうか、やっぱこれダサいっすよね……そういうの正直疎くて」

ぴいち「ダンスするときには、別の服の良いかもです！」

ハルタ「ですよ……なんか良いブランドとかあったら教えてください」

ぴいち「りょうかいです！」

桃、ハルタにもう1万円投げ銭する。

「ぴいちゃんからプレゼントが贈られました」の表示。

ハルタ「え？バグっすか？」

ぴい「だって、服1着じゃダメでしょ？」

ハルタ「ぴいちゃん、マジ神です！本当にありがとう」

桃「可愛い……」

ハルタ「じゃ、最近練習してるダンスするんで見てください！」

ハルタ、アイドルの曲に合わせてダンスを踊る。

リズムに乗り切れていない。

桃、ハルタのダンスを見て、

桃「なんか、これは厳しそうだなあ……」

桃、苦笑い。

だが、画面から目が離せない。
カップラーメンはすっかり伸びている。

○スポーツジム

七実、エアロバイクを漕いでいる。

桃、七実のそばに座って、スマホで

ハルタのダンス動画を見ている。

七実、桃のスマホをチラッと見て、

七実「何？その人が今の推し？」

桃「どう思う？」

七実「何が？顔？服装？それともダンス？」

桃「全部」

七実「甘口？辛口？」

桃「中辛で」

七実「芋っぽい。学生みたい。服がダサイ」

桃「……それのどこが中辛？」

七実「……甘めの中辛よ」

桃「ううん。分かるもん。漂う素人感ってや

つ？配信もしてるんだけどさ、だーれも見

てないの」

七実「そんな人に2万も課金したんだ」

桃「2万500円ね」

七実「え？何回ランチ出来るの？旅行も行け
ちゃうんじゃない？」

桃「そうやって変換しないで」

七実「てか、なんでその人なの？マサ君みた
いに舞台出てる人で良いじゃんか」

桃「前にも言ったけどさ、ちよつとマサ君に
似てるんだよね」

七実、スマホの画面の中で踊るハル
タの顔を見て、

七実「：：似てるか？」

桃「顔そのものっていうか、雰囲気が」

七実「桃ってさ、誰も推してないような、よ
く分かんない人が好きだよね」

桃「みんなの人気者なんか推してもしょうが
ないじゃん」

七実「マサ君も最初はモブだったっけ？」

桃「アンサンブルね。だんだん実力認められ
て、主演もするようになって。ファンも増
えてきたところで結婚だよ？思い出した
らイライラしてきた」

七実「マサ君、今度舞台出るじゃん？」

桃「え？知らない」

七実「もう完全に降りたんだ」

桃「うん。グッズも捨てたし」

七実「え？まじ？」

桃「今はハルタくん一筋だよ」

七実「こういう人ってさ、怖くない？」

桃「なんで？」

七実「ほぼ、素人じゃん？」

桃「だから良いんだよ！まだ、誰も発掘して

ない！推しがある！」

七実「そういう意味じゃなくてさ……」

桃、聞いていない。

七実の隣のエアロバイクに乗る。

鼻歌混じりにエアロバイクを立ち漕

ぎする。

七実、呆れ顔。

○セレクトショップ『P』・店内

ウィンドウショッピングをする桃。

マネキンの前で立ち止まる。

蛍光ブルーのニットである。

桃「ハルタに似合いそう。でも、プレゼント

現物送れないんだよなあ……」

店員近づいてきて、

店員「こちら、入荷したばかりの新作なんで

すよ。一点ものです」

桃「てことは、まだ誰も持っていないし、1人

しか着れないってことですね」

店員「です。買うなら今！って感じです」

桃「あの、この服を二次元に送る方法ってあ

りますかね？」

店員「はい？」

桃「あ、いや。冗談です」

桃、そそくさと店を出ていく。

○桃の自宅（夜）

テーブルの上にはちやし炒め、水。

スマホを見ている桃。

ハルタのSNSを開き、DMを送る。

桃「ハルタに似合いそうな服を見つけました。

良かったら見てみてください。多分こないだの投げ銭で足ります」

と、URLをつけて送る。

満足げに微笑む桃。

× × ×

桃のスマホに通知。

「ハルタが配信を始めました」の表示。

桃、配信画面を開く。

髪型はアイドル風にセットしている。

が、いつものスエット姿である。

ちよつとがっかりする桃。

桃「さすがに今日の今日はなかあ」

ハルタ「こんばんは」

ぴいち「こんばんは」

ハルタ「あ、ぴいちさん。いつもありがとう」

ぴいち「こちらこそ、いつも配信ありがとう」

ハルタ「あ、これみて」

ハルタ、ガサガサと袋から取り出す。

桃が見つけたニットである。

桃「え……」

ハルタ「ぴいちゃんがDMくれた時、ちょうど店の近くにいたからゲットしちゃいました」

はにかむハルタ。

ハルタ「ちよつと着てみるね」

着ていたスウェットを脱ぐ。

桃「わ、まじかあ……」

ブルーのニットを着たハルタ。

ハルタ、頭を掻きながら、

ハルタ「どうかかな？」

ぴい「思った通り、めっちゃ似合ってる！」

ハルタ「こんな、派手っていうか、明るい色の服、着たことないからなんかそわそわするんだけど」

ぴい「これでダンス踊ったら絶対バズるよ！」

ハルタ「そうなたら最高だなあ……」

ぴいち「ハルタなら絶対大丈夫！」

ハルタ「ありがと。んじゃ、今日は新作ある

んで、披露さしてもらいます」

ハルタ、立ち上がりダンスをする。

相変わらずリズムに乗り切れない。

桃「しかし、顔が良いな」

×

×

×

ダンスを終え、肩で息をするハルタ。

桃、ハルタに1万円投げ銭をする。

「ぴいちさんからプレゼントが贈ら

れました」の表示。

ぴいち「ハルタ、最高だったよ！」

ハルタ「わ！ぴいちさん、まじであります！

ぴいちさんのおかげだっと思っててる。また

洋服とか買ったりして、頑張るね」

ぴいち「応援してるよ！」

ハルタ、手でハートを作る。

ハルタ「はい。スクショタイム」

桃「あ、マサくんも好きだったな。ハートポ

ーズ……」

桃、自分の頬を叩いて、

桃「集中集中！」

桃、スクショを何枚か撮る。

ハルタ「……撮れたかな？」

ぴいち「バッチリだよ！」

ハルタ「……いつか、ぴいちゃんに会ってみ

たいな」

桃「へ……？」

桃、立ち上がる。

机に足をぶつけて、声にならない痛

み。

衝撃で水がこぼれる。

桃「私に会いたい……？」

ハルタ「あれ？ぴいちゃん？おい？」

ハルタの声が聞こえていない桃。

○ハルタのSNS投稿

『今日のコーデ』の投稿。

蛍光ブルーのニットである。

かなりサマになったハルタの姿。

セレクトショップ『P』をタグ付け。

「いいね」がどんどん増えていく。

○ネイルサロン・店内

横に並んで施術を受ける桃と七実。

七実「で、洋服を買いだら会いたいと言われ

たと

桃「違うよ。買ったのは本人」

七実「会いたいつて言われたのは？」

桃「事実だよ」

七実「やっぱさ、桃ってガチ恋だよ」

桃「そ、そんなことないつてば」

七実「自分に嘘をつくのはやめなさい」

桃「私にとっては推しであることが重要なん

だよ」

七実「うちらは三次元に生きてるのに、現実

逃避でしかない」

桃「私は推しに生きてるから」

七実「（興味ない）」

桃「私は傷つきたくないんだよ」

七実「まるで、傷ついた経験があるみたい
な言い方」

桃「（慌てて）私だって、三次元の男との恋愛
くらいしたことあるって」

七実「ふーん。で、来週開けといってくれてる？」

桃「急に何の話？」

七実「話したじゃん。婚活パーティー！」

桃「そんな約束してないけど！？」

七実「何言ってるの？そのためにジム行って、
ネイル来てるんじゃない！」

桃「そうなの？」

七実「いつまでも画面越しの男に現を抜かす
のはやめなさい」

桃「説教するのはやめなさい」

七実、ムツとする。

桃、自分の爪を見つめる。

ハルタにあげたニットによく似た

蛍光ブルーのネイル。

対象に、七実のネイルは可愛い
花の飾りなどがついたデザイン。

○ハルタの配信画面

視聴者数「200」とある。

ハルタ、垢抜けた服装。

視聴者のコメントが次々に流れる。

「本物のアイドルみたい」「いけめん」

「おしゃれ」「歌も上手そう」など。

ひたすら踊っているハルタ。

前よりもサマになっている。

ぴいち「すごいね！こないだまで視聴者数1

人だったのに」

「かっこいい」「スクショタイムあり

ますか？」などのコメントが溢れる。

ぴいち「今日はトークなしかな？」

一心不乱に踊るハルタ。

「コーデ見せて」「足長い」など、

新しいコメントが次から次へと。

埋もれていくぴいちのコメント。
桃、小さくため息。

「女いそう」「彼女にして！」「好き」
などのコメントがある。

桃「これだから、ガチ恋勢は……」

優越感のある表情を浮かべる桃。

○桃の自宅（夜）

すっかり片付いた殺風景な部屋。

ベッドに寝転がる桃。

スマホに七実からの通知。

七実の声「パーティー会場の住所です。よろしく！」

桃、ぼんやりと天井を見つめている。

再びスマホの通知音。

ロック画面にはメール通知『真崎和

真メールマガジン』。

桃「いやもう、解除したじゃん！しつこい男

は嫌われるっつーの！」

桃、何となくメールを開く。

添付画像に和真と妻と思われる人物のウェディングフォト。

桃「わ！」

思わず、スマホを投げる。

桃「何て写真送ってんだよ！ふざけんな！」

写真の中にここにこ笑う和真の顔。

○ホテル『クロ―バー』宴会場・入口

『婚活パーティー会場』の看板。

着飾った男女が次々、会場へ入っていく。

並んでやってくる桃と七実。

ドレス姿で着飾っている。

桃はネイルに合わせた青のドレス。

桃、きよろきよろとあたりを見渡す。

七実「どした？もう探してんの？」

桃「いや、ここさ、マサくんのイベントで来

たことあるなあって」

七実「まじ？でも、このホテル大きいから、しょうがないでしょ」

桃 「うん。分かってる」

七実 「感傷に浸ってるの？」

桃 「今日は三次元の男に集中するから」

七実 、桃の肩を乱暴に叩いて、

七実 「お、良いじゃん！その調子！」

桃 「痛いってば……」

○ 同 ・ 中

男女が対面式で次々に会話している。

元気いっぱい
の男と桃。

男 1 「あの、結婚したらうちの親と同居って

出来ますか？」

桃 「（苦笑い）」

ベルが鳴り、男女移動する。

×

×

×

高圧的な男と桃。

男 2 「専業主婦は困るんで、絶対仕事続けてください。あと、子供が出来ても僕は飲みとゴルフは続けたいんで、そのつもりで」

桃 「はあ……」

再びベルが鳴り、男女移動する。

×

×

×

大人しそうな男と桃。

男 3 「あの……えつと……ご趣味は……？」

桃 「（疲れた）」

桃の遠くの方でベルが聞こえる。

○チエーン店のカフェ・店内（夜）

ぐったりとしている七実。

ホットケーキを頬張る桃。

2人ともドレス姿のまま。

七実、桃の食べっぷりを見ながら、

七実 「……よくそんな食べれるね？」

桃 「腹が減っては戦が出来ぬ、でしょ？」

七実「戦はもう終わったけど？」

桃、聞こえないフリで頼張る。

桃「ていうかさ、周りの人も含め、ほぼマツチしてなかったね」

七実「誰か選んだ？」

桃「どの人も覚えてなくて、適当に」

七実「同じく」

桃「でもさ、向こうにとっても同じなんだろうね

七実「よく考えると残酷だよ。パーティーって名前のくせに」

桃「デスゲームって名前にすれば良いのにね」

七実「で、どうだった？ リアルの男は」

桃「あの一瞬の会話で何か分かるとは思えないし、良い人なんか見つけれないよ。ていうか、多分良い人いなかった」

七実「分かるよ。でもさあ、ここまでしないと出会えないんだって事実を突きつけられてショックだよ。選べもしないし、選ばれもしない」

桃「私は、推しがいれば良いや」

七実「いつまでもそれじゃダメだと思うよ」

桃「なんで？」

七実「だって、マサくんにせよ、今の配信者？

にせよ、虚構を愛することに意味なんてな

いんだもん」

桃「今日の人たちだって、私からしたら全員

虚構だよ。そんなふうにならば必死になる七実、

よく分かんない」

七実、桃を睨む。

桃、七実を睨みながら、ケーキを頬

張る。

桃のスマホの通知音。

「ハルタが配信を始めました」の表

示。

桃「あれ、珍しい時間……」

桃、配信画面を開く。

ハルタと隣にはミチ（20）がいる。

桃「は？」

2人はペアルックの服装。

ハルタは桃が薦めた蛍光ブルーのニット、ミチは蛍光ピンクのニット。どこかを歩きながら配信している。「え？外ですか？」「誰？」「彼女？」などのコメントが溢れる。

ハルタ「えっと、こんばんは」

ミチ「こんばんは」

ハルタ「今日は見てくれるみんなに報告があるって、配信してます」

「何？」「結婚？」「ここどこだろ？」などのコメントが流れる。
コメントしようとしたまま、固まっている桃。

ハルタ「これまで踊ってみたがメインだったんですけど、これからはカップル配信をすることに決めました！」

ミチ「いいーい！」

ミチ、拍手する。

ハルタ「実は今までも同棲していたんだけど、
2人で顔出しすることにしたくなって思
って」

桃「同棲……？てか、このニット色違いあつ
たんだ……」

ミチ「せっかくバズったから、この勢いでや
ってみたいなあって感じでゝす」

ハルタ「ね？」

ミチ「お祝いの投げせ……、プレゼントもお
待ちしてます」

ハートポーズをする2人。

「は？」「萎えた」「最悪」などの

批判的なコメントが流れる。

ハルタ「批判的な意見があるのも分かります。
でも、これからも頑張るんで、応援してほ
しいです」

ハルタ、深々と頭を下げる。

×

×

×

※フラッシュ

会場内、悲鳴が響く。

和真「俺を応援してくれるみんなには一番に報告したくて、あえてこの場を選ばせてもらいました。これから変わらず舞台の仕事も頑張るので応援よろしくお願いします」

深々と頭を下げる和真。

×

×

×

唇を噛む桃。

七実、桃の顔を覗き込んで、

七実「おい。大丈夫ー？」

桃「……またなの？」

七実「は？」

桃「許せない。こいつも私も裏切った」

七実「ちよつと落ち着こ？ね？ほら、お茶飲

んで」

桃「ちよつと行ってくる」

七実「どこに？」

桃、スマホの画面を指差す。

七実「待つて待つて、この人たちは画面の向
こうの世界の人じゃん？ね？関わらない
世界でしょ？」

桃、ホットケーキのナイフを手に取
り、店を跳び出していく。

七実「桃！？」

心配そうに後ろ姿を見つめる七実。

○道（夜）

ナイフを手にしたまま、全力で走
っている桃。

×

×

×

足を止める桃。

大きく肩で息をする。

桃「きつつ…もつと真剣にエアロバイク漕
ぐべきだった…」

桃、配信画面に目を落とす。

ハルタとサチ、セレクトショップ『P』の前にいる。

再び走り出す桃。

○セレクトショップ『P』前（夜）

きよろきよろとあたりを見渡す桃。

ハルタとサチが店の中にいるのが見える。

ナイフをグッと握りしめる桃。

○ハルタの配信画面

セレクトショップ『P』にて、買い物をしているハルタとミチ。

「お似合い」「幻滅」「美男美女」

など、様々なコメントが流れる。

両手に紙袋を手に、店の外へ出る。

ハルタ「んじゃ、今日はこの辺で配信終わろうと思います」

画面に向かって手を振る、ハルタと

ミチ。

画面の奥から近づいてくる桃。

殺気だった様子。

桃「許さないんだから……」

桃、ハルタのスマホをはたく。

スマホ地面に落ちる。

「配信は終了しました」の表示。

○セレクトショップ『P』前・夜

呆然とするハルタとミチ。

ハルタ「何してんの？」

ミチ、スマホを拾う。

画面がバリバリに割れている。

ミチ「あー！買ったばっかなのに、割れちゃ

ってる！」

ハルタ「ねえ、オバさん、あんた何したか分

かる？」

ハルタ、桃に詰め寄る。

桃、手に持っていたナイフでハルタ

の腹部を刺す。

ミチ「きゃああああ！！！！」

桃、ナイフを引き抜く。

が、ナイフがぐにやっと曲がっており、刺さっていない。

ハルタ、自分の腹部を見て、

ハルタ「は……？」

桃、ハルタを見つめる。

桃「どうして……？」

桃、警官に取り押さえられる。

ハルタ「お前何なん？俺になんの恨みがあるの？」

桃「私は！ハルタのこと、ずっと信じてたのに！」

ハルタ「はあ？お前のこと、知らねーけど！」

桃「配信で！応援してたのに！どうして！」

ハルタ、冷たい目で桃を見つめる。

ハルタ「は？配信は配信。現実には現実だから。

お前が誰だか知らないけど、こつちの世界

に來んな。ガチ恋とかキモイんだよ」

桃「ちが……私はガチ恋なんかじゃ……」

桃、警官に連行される。

ハルタとミチがだんだん小さくなる。

○警察署・前（翌朝）

ドレス姿の桃、署から出てくる。

疲れ切って、ヨレヨレ。

座り込み、うなだれる。

桃「あーあ、まじで何やってんだろ」

スマホを取り出す桃。

七実から大量の通知。

「無事？」見たら連絡して！」など。

「いろいろあった」

「推しには懲りたから、これからは

生身の人間と恋愛しようかな」

など返信する桃。

桃「なーんか、良いことないかなあ。……な

いか」

足音が近づいてきて、桃の前で止ま

る。

桃、顔をあげる。

目の前には同じくヨレヨレの和真。

和真「桃ちゃん、だよね？」

桃、目を丸くする。

桃「マサ君？」

和真「やっぱり！」

桃「え？夢……？」

桃、頬をはたく。

桃「……！」

しっかり、痛い。

和真「あのイベント以来だよね？」

桃「……うん」

和真「なんか、運命の再会みたい」

桃「びつくりした……」

桃、和真の左手薬指を見る。

何も付けていない。

ほっとする桃。

和真「ちよつと歩かない？」

桃「へ？」

和真「なんか、こんなとこだし……」

桃「（気まずくなり）あ……ですね」

桃、立ち上がる。

○道（朝）

朝早く人気のない通り。

2人並んで歩く。

しばらくの無言のまま。

和真、桃のドレスを見て、

和真「青ってなんか新鮮。桃ちゃんって、俺

に会いに来る時、いつも赤い服着てくれて

たよね？」

桃「……マサ君のイメージカラーだから」

和真「俺、桃ちゃんに支えられてきたって思

うよ。本当に」

桃「……マサ君は、努力と才能でここまで来

たんだよ」

和真「俺がただ頑張っても、応援してく

れる人がいなかったら意味ないんだよ。だ

から、俺がまだ新人の頃から気にかけてく

れてた桃ちゃんには感謝してる」

桃、和真をじっと見つめる。

和真「俺、分かってるよ。結婚したことで正直、俺から離れた人もいるって」

桃「（気まずい）」

和真「だから、また新人の頃みたいにな、誰も見てくれなくても頑張らなきゃって思ってるんだ」

桃「そっか……」

和真「ごめん。こんな話、普段はしないんだけど、桃ちゃんだからつい」

桃「ううん。話してくれてありがとう」

和真、にっこり微笑む。

和真「また、気が向いたら、舞台観に来てね」

桃、小さく頷く。

和真「待ってるから。ずっと」

2人、しばらくの間再び無言。

桃「ところで、どうして警察署にいたの？」

和真「あー、ちよつといろいろあってね。桃ちゃんこそ、何かあったの？警察なんて無縁でしよう？」

桃「……私も、ちよつといろいろあって」

和真「そっか。まあ、人生いろいろだよね」

桃「うん。いろいろ」

少し間。

桃と和真、手が触れそうな距離。

和真「俺、桃ちゃんがファンとして、ちゃんと一線引いてくれるところも好きだな」

桃、手をそっと引く。

和真「こういうところで会っても、騒がないでしょ？　そういうところも」

桃「私にとって、推しは推しでしかないから」

和真「だよね」

2人、なんとなくぎこちなく笑う。

和真「じゃあ、俺このへんでタクシー拾っていくから」

桃「うん」

和真「あ、いつものやる？」

桃「？」

和真、片手でハートのポーズ。

桃も片手でハートを作る。

和真「写真は撮れないけど、なんかこれやらないと締まらない気がする？」

桃「……うん」

×

×

×

タクシーで立ち去る和真を見送る桃。
タクシーが遠く離れていく。
しばらく無言で立ち尽くす桃。

桃「やばいやばいやばい！」

桃、その場をぐるぐる歩き回る。

桃「私、ちゃんと話せてた？ 変なこと言っていない？ 失礼なことしてない？ 大丈夫だったかなあ……？」

桃のスマホの通知音。

七実から「大丈夫！？」

桃、「マサ君に会った」と返信。

スキップをしながら歩き出す。

はたと立ち止まり、あたりを見渡す。

桃「ていうか、ここどこ？」

朝早く、周りに人はいない。

○社員食堂・中

向かい合い食事をする桃と七実。

定食をどんどん食べる2人。

七実、桃をじっと見つめて、

七実「元気そうでよかったよ」

桃「どういうこと？」

七実「桃、まじでやばかったから。スナイパ

ーみたいな目してたもん」

桃「ま、実際スナイプしたからね」

七実「へ？」

桃「そんなことよりだよ。マサ君の舞台、一

緒に観に行かない？」

七実「あれ。生身の人間と恋愛するって話は？」

桃「言ったつけ？そんなこと」

七実「裏切り者……」

桃「マサ君がね、いつまでも待ってるって言

ってくれたから。私は、マサ君を許してあ

げることにしたの」

七実「……な——んか、都合良く解釈してる気がするけどなあ」

桃「七実もマサ君を推そうよ」

七実「どうして？」

桃「だって、七実だって、こないだのデスゲ

ームで、懲りたでしょう？」

七実「それがね、そうでもないんだよなあ」

桃「え？何何？」

七実「周りを見たら、良い出会いがあるって

こと」

桃「どこ？」

七実「桃は、あなたはもっと視野を広げなさ

い」

桃、あたりを見渡す。

行き交う男性社員をしばらく見て。

桃「私にはやっぱ無理みたい」

桃、スマホを取り出す。

壁紙はマサ君との2ショットに戻

っている。

につこりと微笑む桃。

桃「私は、どんなことがあっても、マサ君を
応援し続けるって決めたんだ」

七実「何があっても？」

桃「そう。私は今回結婚を乗り越えたんだか
ら。離婚でも、不倫でも、どんと来い！つ
て感じ」

七実「また、裏切られて傷つくかもよ？」

桃「大丈夫。私は逃げないから。だって、マ
サ君は私のことを必要としてくれてるん
だよ？なのに、私だけ向き合わずにいたら
ダメじゃない？」

七実、お手上げの表情。

桃「私は、リアルの恋なんていらない。推し
がいればそれだけで十分だよ」

鼻歌まじりの桃。

○桃の自宅

部屋の片付けをしている桃。

イヤホンで音楽を聴いている。

ゴミ袋からグッズを取り出す桃。

ポスターをぎゅっと抱きしめる。

×

×

×

家中を和真のグッズで装飾している。

以前よりも赤の度合いが増している

インテリア。

満足そうに微笑む桃。

部屋の隅に脱いだまま放置された青

のドレスを見つける。

拾い上げる桃。

桃「なんで、こんなの好きだったんだろう？」

桃、ドレスをゴミ袋に入れる。

ゴミ袋を手にも、部屋を出ていく。

×

×

×

テレビでアナウンサーがニュースを
伝えている。

アナウンサー「人気俳優の真崎和真さん（3

2）が、妻への暴行容疑で逮捕されました。

真崎さんは先日、ファンクラブ内で結婚を発表したばかりで、主演舞台を来月に控えていました」

壁に貼られたポスターが床に落ちる。

○同・ゴミ捨て場

ゴミ袋を投げ捨てる桃。

額の汗を拭い、満足げな表情。

桃「よし！これでまたマサ君を心置きなく応

援出来る！」

足取り軽く、部屋へ戻っていく。

（おわり）